

米沢興讓館
部活のおゆみ

米沢興讓館 部活OB会連合



温故知新 米沢興譲館 部活のあゆみ 盆地米沢狭けりど〜栄初る歴史300年 世のために取さんこれか興譲興譲の われらが心

米沢興譲館部活OB会連合会長

土澤幸雄

上の文言は、平成25年2月26日開催のOB会連合恒例、理事・幹事の会に於いて、私が部活のあゆみ編集発刊を初めて提起した原案の冒頭に記した、いわば私の趣意であり、テーマです。この合同の会の意見や要望を踏まえて、4月17日の総会に提案。大勢において賛同を得、編集スタッフも承認され発進となりました。

平成25年度内に数回にわたるスタッフ会を経て、あゆみの内容、編集日程、収支予算等細部に及ぶ企画が、翌26年4月26日の総会で承認、発刊を平成27年11月（下旬）開催のOB大会の日とする事も決議しいよいよ始動。編集主幹鈴木基君を主に、各部のあゆみを始め、各分野から寄せられた膨大な資料の編集作業に精魂を傾注、そして今、発刊を迎えることができました。

前校長大貫英一様、現校長岸順一様、元体文後援会長今井昭二様、同窓会長大友恒則様、体文後援会長内藤文徳様、第1回OB大会開催に尽力された当時体育後援会副会長遠藤宏様、以上の皆様からご多忙の折貴重なお手紙を賜り有難うございました。深く感謝申し上げます。

言うまでもなく、主役である各部OB会の誠意努力によって執筆された部のあゆみが、多くの先輩の思い出と共にこの一冊に結集されました。本当に感無量です。

省みますと、このあゆみの編集がすくなくとも10年前であったらと痛感致しております。それは、特に戦前を知る先輩が少なくなり、又資料も十分ではないからです。

しかしそういう中で各部OB会の皆さんはそのハンディを乗り越え、よくぞここ迄まとめられたご努力に改めて敬意を表し、感謝申し上げます。

さて、昭和56年当時、体育OBの燃え立つ熱意が第1回OB大会の開催となり、その基調提言三つの中の一つに「母校創立100周年を記念し体育史を発行しよう！」と呼びかけ、その年の体育後援会報に「体育史を発行いたしたく各部の原稿の準備宜しく。」とあります。しかし100周年の全校あげての大事業は、校舎南原移転でした。平成13年、私が体文後援会会長就任の頃、各部の歴史の統合本の編集を希望として、体文会報に載せておりますが、その編集スタッフ組織とか何よりも予算のメドが立たずそのままでした。

平成21年「部活OB会連合」を結成。体文後援会傘下から離れ、私達自身の組織が誕生し、かつての部活仲間同士、連帯意識の下独自の企画が可能となり、経費の裏づけもできて今日の発刊を迎える事ができた事は大きな意義があり、誇りであると思っております。

各部、自己の部を誇示しつつも、同じ屋根の下で精励しあった興譲館の仲間同士、協調と融和、その結晶が「部活のあゆみ」なのです。

OB会連合も6年を過ぎました。温故知新、部のあゆみも発刊できました。

今、これ迄築いてきた土台の上に更なる充実を目指し、「世代を超え、部の垣根を越え、OB会連合の輪を広げ、絆を固めよう！」このOB大会のスローガンを改めてかみしめ、皆さん共々、新たな「あゆみ」の頁を積み重ねていこうではありませんか。

生物部

部活の思い出

生物クラブの思い出

昭和30年卒 高橋 純一

入学した昭和27年は、米沢高校が東高・西高に分れた年でした。顧問の石栗正人先生が東高へと去られたあとも、栗ちゃんと呼びして慕っていました。相談事で東高へ伺うと、眼鏡越しにじっと話を聞かれたあと、すごい早口で答えられるのが常でした。

部員数は約40人。学校へ遊びに見えた須藤正さん（昭25卒）の当時は、80人の大所帯だったとのこと。初代部長を務められたそうなので、創部もその頃と推測がつかます。われわれの時も古い校舎で、備品と言えるものは真鍮製のレトロな顕微鏡ぐらいでした。

採集会にはよく行きました。残雪の斜平山（愛宕山）で見たコブシ、マンサクの印象が強烈でした。石栗先生等の引率で関根や観音岩の合同採集会にも行きました。

1年の夏休み、「巡回実験」で訪れたのは農山村の中学校。万世、窪田、広井郷、南原、山上の5校でした。参加は生物、気象、化学、理工の4クラブ。生徒たちに顕微鏡をのぞかせ、蛙で実験をして見せても、全然のってこずやきもき。最悪はリヤカーを引いての機材運搬。炎天下で大汗をかき、夕立でずぶぬれ、と散々でしたがいい経験でした。

文化祭では標本室のオタカラをずらりと展示して、見に来た人をびっくりさせました。標本室には県下一の収蔵品が眠っていました。クラブの特権で鍵をあけ、極楽鳥やモルフォ蝶などの貴重品の間を探検したものでした。文化祭では他に、郷土研究、気象、社会、化学、理工、絵画、文芸、音楽、演劇等のクラブがそれぞれに趣向を凝らしていました。

先輩達の中には、渡部吉兵衛氏のように米沢付近の地質や化石の研究成果を校外でも発表している人がいました。OB達が「生友会」を立ち上げ、在校生も呼ばれましたが受験前で無理でした。卒業間近に部長の柿崎正敏君らが、卒業記念論文集『木偶の坊』を発行してくれました。校名が米沢興譲館高校となったのは、我々の卒業後のことです。



昭和27（1952）.9.20～21 マラソン大会後、白布大滝前で1～3年生。顧問の油川博先生を囲んで。



昭和28（1953）.3.8 3年生の送別会。顧問は左から油川博先生（化学）、石栗先生（生物・東高顧問）



昭和28（1953）.9 文化祭。生物クラブでは県下一と云われた標本室の収蔵品を、紹介を兼ねて展示した。



昭和28（1953）.9 文化祭。生物クラブでは県下一と云われた標本室の収蔵品を、紹介を兼ねて展示した。加えて原始人の頭部を粘土で再現し展示した。



昭和28 (1953) .9.20~21 マラソン大会の後、
白布高湯にて1~3年生。顧問・桜井政美先生。



昭和29 (1954) .2.19 卒業間近な3年生と。
前列に顧問桜井政美先生。後列に前顧問油川博先生。

吾妻山植物群落調査の思い出 — 命の「いとなみ」に感動した日々 —

昭和41年度生物クラブ部長 草刈 章



50年の時を経ても吾妻山植物群落調査に携わった日々の記憶は、今でも鮮明に脳裏に浮かんでくる。テントで重くなったキスリングを担いで必死に登った山道、「これ食えるよ」と聞いて口にしたアカモノの甘酸っぱい味、足の踏み場もない程に咲いていたミヤマリンドウやチングルマ、雉打ち（野糞をすること）に行つてふと踏み込んだ足下に咲いていたヤマトキソウの鶉色、鏡のように青空を映した池塘の水面など、断片的に、また連続した風景として臉に浮かぶ。テントの中で青柳先生や相田先輩、友人達と夜の更けるのも忘れて語り合ったこと、小用でテントを出たときに、降る程にびっしりと空を埋め尽くした星々、ちょっといぶ臭い飯盒の飯を食べたのも忘れられない。

群落調査だけではなく、生物クラブでの様々な活動を行った時間は、思い返せば私の人生の中でももっと濃密で充実し、甘酸っぱい味も、そしてそこそこの苦みもあり、まさに青春の中核的記憶として残っている。このような思い出があるからこそ、人生を肯定的に評価でき、その後の困難な状況を乗り越えるための原動力となっていることを自覚する。このような思い出の時と場を与えていただいた母校興議館、そして青柳和良先生、故鈴木安夫先生、先輩、同輩、後輩の皆様は心から感謝を申し上げる。

このような活動で学んだことは、生物はその環境の中で相互にかかわり合いながら、精一杯に生き、子孫を残し、豊かな環境を作り、命を輝かせているということだ。特に感動したのは人形石から天狗岩に向かう途中にある大凹雪田のヒナザクラの大群落だ。長い間雪に閉ざされ、土壌も乏しい環境でどうしてあれほどの可憐で繊細な花をさかせることができるのだろうか？その「いとなみ」に感動し、できればその仕組みや意味を知りたい、そんな気持ちが強くなった。そして将来は命と密接にかかわり合うような仕事に就き、その秘密の扉を少しでも覗いてみたいと思うようになった。そして水産学部か農学部、もし可能であれば医学部を受験することを目指すことにした。

運良く医学部に進学し、3年生になって解剖、生理、生化学、発生学の講義を聴き、夢中で教科書を読んだ。講義を聴く度、あるいは教科書のページをめくるごとに、次々と生命に関する新しい知識を教わり、様々な謎や疑問が少しずつ解かれてゆき、自分の世界が広がって行く感覚を覚えた。あたかも登山で眼前の霧が晴れ、遙か遠くの峰々や稜線がくっきりと見渡せるようになった感じだ。生涯でこのとき程集中して勉強したことはない。忘れられないのは第二解剖学の試験だ。3巻に分かれている分厚い解剖学の教科書を徹夜して何度も読み込み試験に臨んだ。B4のわら半紙を3枚配られ、黒板に「錐体路系について知るところ記せ」と問題が出された。錐体路とは大脳皮質の運動野から脊髄、そして筋肉への意思的運動を伝える重要な神経伝導路だ。試験は10時に始まって、答案を書き終わった他の学生が次々と退室していくなか、私は一人、午後3時まで居残って3枚の用紙裏表にびっしりと勉強したことを書き記した。お陰で97点の高得点を獲得した。

医師になって暫くは、自分で納得できる医師になるための修業に力を注いだ。そのため、この問題意識は一時遠のいていた。30年前に開業して、日々子ども達の発熱や咳、嘔吐、下痢、湿疹などの日常的な病気の診療に明け暮れ

るようになった。当初はこのような患者を診ることは何の発見も驚きもないものと思っていたが、次第になぜ風邪をひくと熱や咳が出るのだろうか、それはどんな意味があるのだろうかと考え始めた。高校時代の生物クラブの活動で感じた同じ意識だ。そしてその謎と解く鍵として「進化医学」という概念を知った。それは、我々人類が、否、今地球上に棲息している全ての生物がこのような^{すがた}姿形をしているのは、それぞれの環境に適応し、命をつないできた結果であり、それは病気になったときに普通に見られる、発熱や咳、鼻汁などの諸現象も同様に進化の過程でもっとも生存に有利になるようにと選択されてきた結果であるという考え方だ。そうなると、今までの医療、かぜの患者には解熱剤や咳止め、吐き気止めの薬をだすような治療法は間違いということになる。私はこのことを知ったとき、子どもの訴える症状がすべて意味のあるメッセージに思え、一人一人の命がきらきらと輝くように思えてきた。そして解熱剤や咳止め、下痢止めなどを使わない、自然治癒力を最大限に引き出すような医療を心がけることにした。

進化医学、すなわち命の原理と原則を充分に考慮して行う医学は、安全、安心、安価、安楽を保証する、いわゆる四安医療の実践につながると確信し、この道をさらに極めたいと思っている。



調査はまず朝の腹ごしらえから



群落調査を終えて一休み



悪天候のため野外調査は中止、室内ワーク



秋色の深まった吾妻山で最後の調査



藪をこいで樹高調査

生物部の思い出

昭和56年卒 竹田 靖

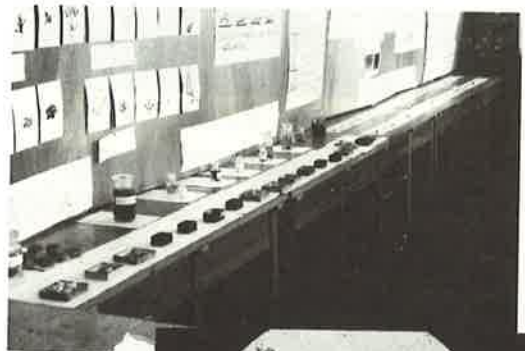
生物部は、まず、入部したての五月、部のOBの方々と共に、吾妻山に植物観察に行く。そこで、初めて様々な植物について、一つ一つ詳しく学び、吾妻の貴重な動植物を初めて認識する。ゴゼンタチバナ、モウセンゴケも初めて見、いろいろな植物の名前を覚えることは良いことだなあとしみじみ思った記憶がある。本校生物部は、吾妻山の植物の群落調査で、他の追従を許さなかった時代がある。

夏休みは、隔年で山か海での合宿だ。海は、いつも鼠ヶ関の丸イ旅館に宿泊し、徹夜でウニの発生をした。当時の鼠ヶ関は、護岸工事もなく、手のつけられていない磯は、ウニが足の踏み場もない位いた。我々は、一日中素潜りし、文化祭の目玉となる海藻標本作りをし、美しい海中生物を写真に収めた。ウニの発生は、実習教諭の色摩さんに教わった自作のガラス管を用い、ウニを人口受精させ、徹夜で卵割を観察するものだった。受精から幼生まで段階ごとに固定し、後日それぞれの段階のプレパラートを作るのだ。雑魚寝・顕微鏡、夏の暑さに磯臭さ、かき氷、忘れられない夏だった。

偶然、南陽市砂塚でカブトエビが発生したこともあった。カブトエビの専門家で顧問の小方芳徳先生のご指導の下、理科連で研究発表を行った。カブトエビの分類や脚の形状のスケッチ等の発表であった。

また、鬼面川近くのため池でクラゲが発生したこともあった。後輩を引き連れてタラの木茂る急な崖を降りやっと現場にたどりついた。学校に帰ると、顧問の先生に無断で観察に行った事をひどく叱られた記憶もある。

現在、縁あって母校の教員をしている。生物部は科学部に統合されたが、今も、昔作ったプレパラートが残っている。ボタン一つで全ての情報が得られる時代、純粋に土のにおい・カエルの卵の手触りが好きで、皆で歩き回ったあの時代が懐かしい。



昭和47年～48年頃

前列左から2番目 山口保直先生・3番目 小方芳徳先生